馬の顔

田中貢太郎

青空文庫

暗い中から驟雨のような初夏の雨が吹きあげるように降っていた。道夫は傾斜の急な径を日和下駄を穿いた足端でさぐりさぐりおりて往った。街燈一つないその路は曲りくねっているので、一歩あやまれば転がって尻端折にしている単衣を赭土だらけにするか、根笹や青薄に交って漆の木などの生えた藪畳の中へ落ちて茨に手足を傷つけられるかであった。そこは——学校の傍から——町へおりる捷径であった。普通に——町へ往くには学校の崖下になった広い街路を往くのであるが、それではひどく迂路になるので、彼は平生のようにその捷径を選んだのであった。

道夫はその日友人の下宿へ往って二人で酒を飲んでいた。彼は画家であった。彼は友人の処でウイスキーとビールをごっちゃに飲んで腹の中がだらけたようになっているので、熱い日本酒を飲みたいと思ったが、杖頭がないのでしかたなしに通りすがりのカフェーやおでんやの燈に心を牽かれながら帰っているところであった。

十一時はとうに過ぎていた。小さくなっていた雨がまた音をたてて降って来た。道夫は立ちすくみながら坂の下へ眼をやった。坂の下は黒暗暗として何も見えなかった。生垣があり※駝師の植木があって、人家は稠密と云うほどでもないが、それでもかなり人家があるので、燈の一つも見えないと云うはずがなかった。

（おかしいぞ）

しかし、道夫はそんなことよりも早く下宿へ帰って、寝ぼけている婢にはかまわず、台所から酒を持って来て己で燗をして飲みたかった。

雨はすぐ通りすぎた。彼はまたおりた。青い刻煙草の吸殻のような光があった。それは根笹の葉裏に笹の葉の繊維をはっきり見せていた。

（おや）

それは蛍か何かであろう。彼は嘗て支那の随筆の中で読んだことのある蛍に関する怪奇な譚を思いだした。それは夏の夕一人の秀才が庭の縁台の上で寝ていると、数多の蛍が来て股のあたりへ集まっていた。秀才がそれを見て冗談を云うと、蛍火が消えて美しい女が出て来たので、それを愛好したと云う話であった。

（どうだい、君も美人にならないか）

そのひょうしに足がすべってずらずらとずり落ちた。彼は落ちながら前のめりになろうとする体をやっと支えて立ちなおった。立ちなおって気をつけてみると坂路をおりつくしていた。

（おや、おりたのか、美人のことを考えてたから、うまく一息におりられたぞ）

道夫は気もちがよかった。彼は体を真直にして歩いた。傘が何かにひっかかってざらざらと音をたてた。

（垣根にひっかかったのか）

雨は小降りになっていた。傘の右にも左にも、ろそう桑のような大きな葉をつけた木の枝が

あった。傘はその枝葉に支えられていた。両側に桑の枝葉があるなら桑の畑でなくてはならなかった。

（桑の畑があったかなあ）

終始その捷径を往来している道夫は、そこに桑畑のあることは知らなかった。

（※駝師の庭ではないか）

※駝師の庭か桑畑の中か、往ってるうちには判るだろうと思った。彼はその枝葉に傘をとられないように傘をつぼめて歩いた。雨がまたざあざあと音をたてて降って来た。路はぬかっていた。彼は傘と脚下に注意しいしい往った。

（やっぱり桑畑かなあ、こんな処に桑畑があったかなあ）

桑畑のような枝葉の間の路は長かった。そのうちに雨の音がしなくなった。彼は隻手を外へ出してみた。雨はやんでいて雨水は手にかからなかった。雨がやんだのに傘をさしているのはつまらないことであった。彼は傘をたたんで、物を撲りつけるような恰好で傘の雫を切りながら左の手に持って歩いた。

（おりる路をまちがえたろうか）

そのあたりですこし位路をまちがえたところで、そんな広い畑はなかった。

（おかしいなあ、狐につままれたと云うことを云うが、狐にでもつままれたろうか）

その時ふふうと云うような何物かが鼻の端で息をするようなけはいがした。彼はびっくりし

て右側へ眼をやった。そこには長い長い獣の顔が二つ三つうっすらと見えていた。

（おや、馬がいるのか）

彼はまた左側へ眼をやった。そこにも長い獣の顔が一つ二つ浮いていて、それが鼻息をたてているのであった。

（それじゃ、どっかの牧場か）

なににしても馬に噛まれてはたいへんであるから、噛まれないようにと用心しながら歩いたが、そのあたりに牧場のあるのはおかしかった。彼は朝夕に散策もすれば、写生にも出てそのあたりの地理に精しかったので、牧場のあるのが腑におちなかった。

（もし、牧場だとすると、たいへんな処へ往ってるのだ）

彼はちょっと立ちどまって考えた。——学校のてまえにあった五六軒のカフェーも二軒のおでんやも見なれた家であった。また学校も学校の柵も、学校のはずれの十字路の街燈もたしかにまちがっていないうえに、その十字路を学校の崖下の方へすこし往って、枝の禿びた接骨気の木を目あてにしてその傍からおりていることもたしかに判っているので、他へ往っている気づかいはないのであった。

（それにしてもこの馬はどうだ）

またふうと云う数疋の鼻息がした。彼はまた眼をやった。右側にも左側にも二つ三つの顔が浮いていた。

（とにかく、牧場があるなら、番小舎があるだろう）

とにかく往くところまで往ってみようと思いだした。彼はまた歩きだした。そして、眼をやると馬の顔が浮いており、耳をたてると鼻息がするのであった。彼はやや気もちがおちついて来た。彼はビールか水が一ぱいやりたくなった。熱い日本酒のこともそれとともに思いだした。

（えらい処へ来たものだ）

彼は早くそこを出たかった。彼は前へ眼をやった。そこに明るい燈を見つけた。

（家があるぞ）

彼はうれしかった。彼は急いで燈のある方へ往った。そこに一軒の家の袖垣のような低い生垣の垣根があった。その生垣越しに縁側が見えた。

（牧場の主人の家だろうか）

どこでもいいから早く往って他へ出る路を聞こうと思ったが、彼はそれよりも人の顔を見て人の声を聞きたかった。彼は長い間人のいない世界にいたようで人がなつかしかった。そこは瀟洒な演戯の舞台に見るような造作で、すこし開けた障子の前に一人の女が立っていた。それは三十前後の銀杏返のような髪に結った女であった。

「もし、もし、しょうしょうおたずねします」

彼は女を驚かさないようにと思ってつとめてやわらかに云った。女は顔をこっちへ向けた。

「はい」

「僕は路に迷ってるのですが、ここは牧場ですか」
「そうでございますよ、あなたはどちらへいらっしゃいますの」
「僕は――町へ帰るのですが、どちらへ往ったらいいのでしょう」
「――町、それはたいへんですよ、いっぷくなすって、ゆっくりお帰りになるがよろしゅうございますよ、お茶でもあげましょう」
喉もかわいているし、泡くってはいけないと思ったので、休ましてもらいたいと思ったが、深更に見ず知らずの家へ迷惑をかけるのも気のどくであった。
「ありがとうございます」
「ほんとにお入りなさいましよ、こんな時には、気をおちつけになるのがよろしゅうございますよ」
「御迷惑じゃないでしょうか」
「なに、お嬢さんと二人ぎりでございますから、よろしゅうございますよ、お入りなさいましよ」
女二人ならべつに気づまりなこともないし、縁側へ休ましてもらう位はいいだろうと思った。
「それじゃ、すみません」
「そこからいらしてくださいましよ、その扉はよせかけてありますから」
「そうですか」

垣根にはしおり扉があった。道夫はそれを押して入った。庭には石南のような花の咲いた木があった。彼は庭の敷石を伝って縁側へ往った。

「すみません、ちょっと休ましてください」

「さあ、どうぞ、雨でたいへんだったでしょう」

「えらい雨でしたね」

道夫は手にした傘をまず立てかけて斜に腰をかけた。腰をかけながら室の中へやるともなしにやった眼に、島田の髷をかしげるようにして坐っている壮い女の白い隻頬を見た。それは年増の云った令嬢でなくてはならぬ。

「あなたは、お酒をあがってらっしゃるでしょう」

年増は水みずした眼を見せた。

「そうです」

「お酒がお好き」

道夫は微笑した。

「すこし飲みます」

「では、お酒をあげましょうか」

なんぼなんでも酒を飲ましてくれとは云えなかった。

「どうか、水を一ぱいください」

「水もあげますが、お酒もあげましょうよ」

年増はもう起って縁側を左の方へするすると往ってしまった。道夫はちょっと困ったが、もともと物に拘泥しない質であるから、すぐそんな心づかいなどは忘れて室の中へ眼をやった。それは島田髷の壮い女の顔をはっきり見たいがためであった。島田の女は隻頬を見せたままでいたが、それは膝へ小説かなんかを乗っけて見ているようであった。そこへ年増が盆を手にして引返して来た。

「何もお肴がございませんよ」

盆には一本の銚子に猪口を添え、それに※脯のようなものを小皿に入れてつけてあった。

「どうもすみません」

道夫はさすがに手をもじもじさしたが、熱い日本酒は飲みたかった。年増は銚子を持った。

「お酌したことがございませんから、恰好がへんですが、お一つ」

「すみません」

道夫はちょっと頭をさげて盃を出した。年増はそれに酌をした。

「お酌しつけないものがお酌しては、かえってお酒がまずうございましょうから、あなたがどうかごかってに」

「それじゃ、かってにいただきます、すみません」

己のもののようにかってに酌いで飲むのはわるいと思ったが、飲みたい飲みたいと思ってい

た酒にありついたうえに、それがばかに旨いのでひきずられた。
「お酒がたいへんお好きのようでございますね」
「酔っぱらいで困るのです」
「どれ位めしあがりますの」
「さあ」
飲みだすと一晩中でも飲むので己ながらはっきりした量が云えなかった。
「御自身で判らないほどめしあがりますの」
道夫は苦笑した。
「そうでもないのです」
「今晩はどこであがっていらっしゃいました」
「友人の下宿で昼間から飲んでましたが、ビールとウイスキーで、帰りに日本酒を飲みたかったのですが」
うっかり云ってつまらんことを云ったものだと気が注いた。
「飲みたかったが、どうなさいましたの」
女の笑い声がした。
「金がなかったから、下宿へ帰って飲むつもりで帰ってたところですよ」
「そう、ほんとにお好きねえ、それじゃうんといただいてくださいましよ、お酒はどっさりあ

りますから」
　年増はもう起って往った。道夫はちらちらする眼で絵のようにそれを見ていた。
「よくつきました」
　年増は後の銚子を持って来ていた。
「どうも、これは」
　道夫はまたその銚子に手をかけた。
「そんなにおいしゅうございますの」
「旨いですよ」
「わたしも、お酒がいただけるなら、いいと思うことがあるのですよ」
「酒は飲まないのですか」
「一滴もいただけないですよ」
「そうですか、ねえ、旨いのですが、ねえ」
　年増の佳い姿がはっきり道夫の眼に見えた。それは勝浦の旅館で知りあった婢にそっくりの好ましい姿であった。
「おあがりなさいましよ、お嬢さんが淋しがっておりますから、おあがりになって、ゆっくりなすってくださいましよ、それとも待ってらっしゃる方がおありなさいますの」
「そんなものがあるものですか」

「では、おあがりくださいましよ、お酒のおあいてはわたしがいたしますから」
年増の眼は道夫の魂を誘った。彼は年増からはなれることがいやであった。
「足が泥だらけですから」
「おふきしますから、こっちへいらしてくださいましよ」
「そうですか、それでは」
道夫はよたよたと縁側へあがった。年増はすぐ寄って来て道夫の隻手をやわりと握った。
「どうぞこちらへ」
道夫は年増の導くままに縁側を左の方へ往った。
「ちょっとお待ちくださいまし」
道夫はたちどまった。年増の手にした雑巾であろう温な片が双足に来た。年増の香油の匂いが気もちよく鼻にしみた。
「さあ、どうぞ」
年増の隻手は道夫の肩にかかった。道夫は待合にでも往ってるような気になって女に体をまかして往った。
「ここよ」
そこは青い絹の夜具を敷いた室であった。
「ちょっと横におなりなさいましよ、酒も今持ってあがりますから」

年増の頬は道夫の頬にくっついていた。道夫はうつらうつらとしていた。そして、暫く睡ったようになっていた道夫は、尖のある女の声を聞いた。

「この野干、またふざけやがって」

それは紙燭のようなものを手にした島田髷の壮い女であった。傍には彼の年増が小さくなって俯向いていた。

「おまえさんは、どうした人間だい、まごまごしよると、そのままにはおかないよ」

道夫は恐ろしいのでそのまま飛び起きて走り出た。そして、どこをあてどもなしに走って、やっと気が注いたところで、そこに板屋根の小窓から威勢のいい燈の見えている家があった。

道夫は安心してその窓の方へ寄って往った。そこは小さな鍛冶屋の工場で、※の火がかんかんおこっている傍に、銀のような裏白な髪をした老婆がいた。それは鉄の焼けるのを待っているような容であった。

「もし、もし、――町へは、どう往ったらいいでしょう」

老婆はぎろりと眼を光らして、黄ろにしなびている頤を右の方へ一二度突きだした。道夫は鬼魅がわるいので、もう何も云わないで老婆の頤で指した方へ往った。と、すぐ見おぼえのある――町へ出て下宿へ帰ることができた。翌日になってその画家は老婆の家から牧場、牧場の中の怪しい家を探したが、そんな家もそんな場所もどこにもなかった。

後になってその画家は、その土地のことに明るい人から、昔、そのあたりは馬小舎があった

と云うことを聞いたが、それ以外には何も判らなかった。

青空文庫情報

底本：「日本怪談大全　第一巻　女怪の館」国書刊行会
　　1995（平成7）年7月10日初版第1刷発行
底本の親本：「日本怪談全集　第三巻」改造社
　　1934（昭和9）年
入力：川山隆
校正：門田裕志
2012年3月8日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

馬の顔

田中貢太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/